

## 今号の表紙

### 郡司ベギオ幸夫『痕跡候補資格者-転回』（2023） （ダンボール・針金・サーボモーター・マイコン）

作品を完成させるということは、一個の生命が生まれるということと本質的に同じである。一個の生命が個物として誕生するように、何らかの作品を完成させることは可能か。私は、そのようなことを考えながら、制作に向かった。

存在とはうつろいゆくものであり、生成である。イリヤ・プリゴジンの散逸構造や、ポスト構造主義の哲学は、生成の反復として存在を捉えた。反復は、単純な繰り返しとは違っていつの間にか変質するものの、始まりも終わりもない、永遠の「途上」である。

そのような物質の流れの途上において、「わたし」が生まれ「わたし」は死に、解体されていく。そこにはただ物質における生成の反復があるだけだ。もしそう言い切るなら、それは「わたし」や意識や心を幻想にすぎないと見做し、否定することになる。しかし「わたし」には始まりと終わりがあり、時間的にも空間的にも個物として成立している。

生成としての存在を受け入れながら、「わたし」を理解すること。その一つの実践が、うつろいゆく時間の中に作品を個物化させることなのである。

個物化はいかにして可能なのか。私は、「わたし」が窺い知れない外部にとって「不在」とみなせるものを作り出すことによって、何かが召喚され、それが作品化を実現すると考えている。それによって本作を制作したのである。

それは、生化学反応としての「時計」の起源を理解するとは、どのようなことなのか、にも通じる議論だ。それは、いかにして振動を構成する物質群が、そこに召喚され集うようになったのか、という理解の仕方を意味するのである。

（参考）郡司ベギオ幸夫（2023）『創造性はどこからやってくるか：天然表現の世界』ちくま新書

Yukio Pegio Gunji 生命論・天然知能研究者。神戸大学理学部教授などを経て、現在、早稲田大学基幹理工学部表現理工学科教授。『生きていることの科学』『生命壺号』『群れは意識を持つ』『天然知能』など、著書多数。

編集委員より：物理学、計算理論、生物学、認知科学、哲学などにまたがって、強靱な思考と縦横無尽な展開により、刺激的な生命理論・時間論を発表し続けてきた郡司ベギオ幸夫さん。近年、人工知能ならぬ天然知能・天然表現というコンセプトを掲げ、アートの制作・発表も積極的に手掛けるようになりました。本作は、段ボールをちぎって作られた無数の塊が針金で縦横無尽に繋がって構成され、天井から吊られています。時々モーター制御を伴って予期せず動めき、奇妙な骨格や分子模型のようでありながら、謎めいた気品もあり、得体の知れないぬめっとした感覚も催されるような不思議な鑑賞体験でした（2023年3月京橋ASK?ギャラリーでの展示）。生命や時間を探究するとはどういうことなのか、科学と芸術ののびきならない関係性の中で当事者として向き合い、「創る＝賭ける」ことの切実さを改めて感じさせられます。難解と言われることの多い郡司さんのご著書にあって、上に参考として挙げられている最新刊（新書）は内容が濃いのにとても読みやすいので、表紙を楽しんでいただくのに併せてお読みいただければと思います。

（装丁：岩崎秀雄）